
カコノミライ

館波実笠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カコノミライ

【Nコード】

N9222C

【作者名】

館波実笠

【あらすじ】

今までの日常。これからの未来。天秤にかけることなどかなわないそれを……………かけるとしたら、あなたはどうしますか？

1・狭間（前書き）

全編携帯のメール投稿で書いてみようかな、と思い立ち、始めてみました新連載。最後までお付き合いいただけたら幸いです。

1・狭間

一つ、方法があるとしたら、それは、この方法しかなかった。

例え、未来の人間になんと言われるようになるうとも、例え、過去に類を見ないことであろうとも、

そんなことには、かまっていられなかった。

この方法でうまくいかなければ、未来も過去もないのだから…

自分たちがいなければ、そのどちらも存在し得ないのだから。

暗い、肌寒い空間に無機質な機械のアラートが鳴り響く。

まるで、なにかの終わりを告げるかのようなそれは、彼女にとって耳障りなもの以外のなにものでもなかった。

音に連動するようにして、彼女の前の空間が薄明るく光った。モニターになっているのだ。

『目標座標まで、 $X + 7 : Y - 6 : Z \pm 0$ 。カウントダウンを開始しますが、よろしいでしょうか？』

「現時点での帰還座標を記録後、艦にデータ転送。その後カウントダウン開始」

冷静な声で彼女は指示を出す。

『了解。マージング完了。座標データ転送……完了。カウトダウン開始します』

そう機械の声が言うのと同時に、目の前のモニターに文字の羅列が表示される。

（この数が無くなったとき、それが世界の始まりになる……）

——彼女は小さく頭を振った。

（いえ、始まりなんかじゃない。私は…私たちは……『彼ら』にとつての敵なのだから）

ため息が漏れる。こんなこと、誰が望んでやるというのか…

その過去を消してやりたいと、彼女は願った。

2・日常

夏も終わりに近づき、秋が始まると同時に過去の記録を更新した暑さがまるで嘘のようにどこかにいつてしまっていた。

窓を開ければ、昨日から降り続いている雨の湿気を含んだ冷たい風が吹き込んできた。

「あゝ……夏が過ぎてゆくゝ」

「いつまでクヨクヨしてるのよ」

「まったくだな、少しは千夜を見習って勉強しとけよな、宗志」

宗志と呼ばれた少年は力無く窓の手摺りにもたれ掛かった。やる気のない雰囲気をやたらめったに振り撒いているようにしかみえないのは気のせいではないだろう。

「だ、だいたいなあ、どうして俺と一緒に遊んでた千夜と啓一はそんなに余裕なんだよ？」

机の上の参考書と睨み合いをしていた啓一は深くため息を着いてみせた。髪が傷むほど脱色してしまった金髪が風に揺れた。

「俺らはな、家に帰ってまで遊んだりしないの。どっかの誰かと違ってな？」

「うわっ！でたよ、この不良優等生が。お父さん、そんな子に育てた覚えはありませんよ！？」

「誰がお父さんだっ」

そんな二人を見て千夜はくすりと笑う。

「宗志がちゃんと勉強しとけばよかったんだよ？」

「ぐ……」

本当ならぐうの音もでない宗志だが、しぼり出すようになると、肩をおとした。

高二の夏。

宗志たち三人はそれまでと同じようにつるんで、遊んで、相変わら

ず課題を残して…

ずっと、このままだと思っていた。今までも、今も、明日も、明後日も、この先、ずっと……………

3・幼なじみ

「まったく、啓一も千夜も冷たいんだよなあ」と、宗志はつぶやいた。

学校からの帰り道、方向の違う二人とは別れた宗志は表通りを少し入った裏道を歩いていた。

裏道といっても民家が軒を連ねる狭い道で、道が開けるとその先には昔からある田畑が広がっている。

小さい頃は宗志もよくこの辺りで遊んだものだった。都心からさほど離れているわけでもないのに、山も川もあって、田舎っぽい遊びなら一通りし尽くした。

「宗志！」

と、後ろから呼ぶ声がしたので振り向くと、そこには自転車にまたがり、息を切らした千夜の姿があった。

「千夜？ どうしたんだよ？」

確かに先ほど別れた彼女に宗志は訝しげな表情を浮かべた。

「……どうせ宗志、家に帰っても勉強しないだろうから、たまには手伝ってあげようって思ったの」

「え……？」

「いらないならいいけど？」

「いりますいります！」

このときは千夜が仏に見えた宗志だった。

千夜は自転車を降りると、それを押しながら宗志の横に並んだ。艶やかな黒髪が宗志の胸ぐらいいの高さにある彼女の肩を滑るようになり、びいた。

「こつちに来るのも久々ね」

「千夜はな。高校入ってから来てないんじゃないか？」

千夜も昔ここで遊んだことを思い出しているらしい。

「そういえば、あの洞穴もまだあるのかな？」

「洞穴……？」

彼女の言葉に疑問符を浮かべる宗志。

「ほら、みんなでかくれんぼしてたときに、私が隠れてたところ。宗志が鬼だったんだけど、見つけれなくて大変だったじゃない？夜になっちやってさ」

「え……？」

…宗志にはその記憶がなかった。かくれんぼをしたことはある。しかし、千夜がそんなところに隠れただろうか？

「その洞穴って、どこだ？」

4・洞穴

「もうっ、忘れちゃったの？」

少し機嫌の悪くなってしまった千夜に連れられて、宗志は記憶にない洞穴の前にいた。

確かに洞穴は彼の目の前にある。つまりそれが千夜の記憶間違いではないということだ。もちろん彼女がここに隠れたということが勘違いかも知れないが。

「結局夜になつても見つからなくてさ、みんな慌てちゃって親まで出て来る始末」

…ということは、母さんは覚えているかもしれないな、と宗志は思った。

「小学校のときか？」

「うん。…本当に覚えてないの？」

訝しげな表情を浮かべる千夜。

二人は洞穴の中へ歩を進めた。もう時間帯も夕暮れ近いため中に入る光も少なく、薄暗い。

「……ああ。ここには初めて来たと思う」

そう言いながら、ポケットから携帯を取り出すと、カメラ用のライトをつけた。これで中がよく見えるようになる。

ずいぶん奥がある洞穴だった。ライトで照らした先にも暗闇は広がっている。冷たい風が中から吹き抜けてきた。

「どっかと繋がってるのか？」

「わからないわ。私も一番奥まで行ったことはないから」

なぜか、宗志はこの洞穴が気になっていた。別に千夜の言葉を、忘れた、で済ませてしまえばそれでよかったのだが、何か気になる。何か喉につかえているようで気持ち悪い。

それは千夜も同じ様だった。

「な、なんか怖い…」

苦笑混じりに千夜は言う、宗志の服の袖をつまんだ。

「…ん？」

不意に宗志が足を止めた。勢い余ってついて来た千夜が背中に衝突する。

「っ？……どうしたの？」

「いや、今何か光ったような気がして…」

それは宗志がライトで照らした先で光った。四方が土だけのはずなのに、それは確かにきらりとライトの光に反射して瞬いた。しかしガラスのようなものではない。なぜなら緑に光ったからだ。

「何だ？」

宗志は身を屈めながら近づく。したがって千夜も付き添う形となった。

………がぱっ

次の瞬間には、二人の姿は消えていた。

5・道

強かに身を地面に打ち付けた宗志は意識が戻ると同時に咳込んだ。落下した衝撃で詰まるようになっていた器官から息が破裂するように吐き出される。

「つか……はっ……げほっ……」

そう、自分は確かに落下したのだ。光に気を取られた次の瞬間に自分は……そしてすぐそばに横たわっている千夜も……ふっと体が浮くのがわかった。あとはいきなり現れるようにして開いた穴へ吸い込まれるようにして落下していった。

あの光は一体なんだったのだろうか？ここはどこなのだろうか？

ふと辺りを見回してみると、そこもまた四方を土肌に覆われた洞穴であつた。

洞穴の下にまた洞穴、ということだろうか？

「……千夜……？」

とりあえず宗志は思考を中断し、千夜を軽く揺すった。自分と同じ高さを落ちてきたわけであるから相当な衝撃がその身にかかっているはずだ。下手をすれば打撲どころではなく骨折をしているかもしれない。

「ん……う……」

反応があつた。しばらく声をかけつづけると、千夜は目を覚ました。

「あ、れ？ここは？」

状況が理解できていない千夜は打ち据えた体を摩りながら起き上がった。

どうやら大きな怪我はしていないらしい。それを確認すると宗志は今の状況をわかる範囲で説明した。

「それじゃあ、ここは地下なの？」

「そつだろつな。どうやら、ここにもまだ先があるらしい」

再びライトを点すと、穴はまだ先に続いていた。反対側は壁。ライ

トの先にしか道はない。

「行ってみるか？どちらにしてもここから出なきゃ行けないからな。上は……見えないしな」

「……うん」

千夜は小さく頷いた。

彼女の手を取り、引き起こすと、制服についた泥を払ってやった。

千夜は小さく息を漏らす。

「……どうした？」

「……うん、なんでもないよ」

宗志は千夜の曖昧な返事を不思議に思いながらも、先に進むことにした。

こちらの穴は風が吹き抜ける音もしない。まったくの、ただひたすらに、無音。

……いや、微かに、ぴちゅん、と水の滴る音が響いた。

「戦争中の防空壕なのかな？」

千夜は静か過ぎるのが不安で口を開いた。

「どうだろうな。こんな深くて長い防空壕なんて聞いたことないぞ？」

宗志の言う通りだった。二人はすでに、上にあった洞穴に入ってから五分以上は歩いている。距離にしたらただの防空壕とは考えられない。

「ん……？」

それまで二人の少し先の足元を照らしていたライトの明かりが、土の地面以外の何かを照らし出した。

それは地面から垂直で……壁だった。

「行き止まり……」

「まさか……道はこつちにしかなかったのに」

宗志は狼狽した声でそう言いながら壁に近づいた。まさかこれ以上落ちるようなことはあるまい。

壁に手をつくると、土肌がばらばらと碎けるようにして落ちた。

「……？」

宗井はそれらに強をひくるやうにして壁をえぐる。

6・壁

「宗志……？」

千夜が覗き込むようにして彼の肩越しに壁を見ると土の茶色の面から銀色をしたものがあらわになった。

「何だ……これ」

さらに土を払う。そしてさらにあらわになる銀色の壁。

四方三十センチほど土を取り払ったところで手を止める。

どうやら土の下に完全に隠れるようにして、それは存在していたらしい。人工的……この洞穴も人工的であるが、それとは比べものにならないほど近未来的な壁。

二人が呆氣に取られてそれを見ていると急に壁に光が走った。

「うわっ……？」

慌てて飛びのく。先程の落下といいなにが怒るかわからないからだ。

「な、なに？」

千夜も思わず身構える。

『……起動確認………動作チェック不可。索敵機能低下。各部イ
エローランク。修復の必要性あり。自己修復機能を再開させる』
なめらかな、それでいてどこか堅苦しい言葉。

「だ、誰だっ?!」

宗志が辺りを見回すが、二人以外に人影はない。見えないだけかもしれないと、ライトで背後を照らしてみるが、やはり誰もいない。
心配すらない。

「誰も……いない……？」

「……じ、やあ、今の声は？」

二人の視線が再び前に向けられる。そこにはただ壁があるだけ。

「………これが……？」

宗志は自分の推測があまりにも現実離れをしていると思い、そう言
って口を閉ざしてしまった。

「……」

そう思ったときには、目の前の壁はどこか巨大な印象を与えるものとして、宗志に改めて認識された。

『……生体反応を確認。………認識コードの提示を要求する』

7・謎

「な、なんだよ……いきなり……認識コード？」

ただ要求したきり、再び沈黙してしまった壁。

「……認識コード……名前かなにかかしら……」

千夜は冷静そうに顎に手をあてると呟いた。

『返答がない場合は敵対したとみなし、攻撃行動をとるものとする』
明らかな警告。

「お、おいおい……！」

「名前……わ、私は南澤^{みなみさわ}千夜！こっちは浪川^{なみかわ}宗志！敵じゃないわ！」

さすがにこの警告には慌てた様子で千夜は答えた。

『……敵対リストに該当名なし。……所属部隊は……』

「？」

「軍隊じゃねえんだから……」

緊張が少し緩んだためかつっこみを入れる宗志。

「宗志……たぶん学校名を答えれば大丈夫だと思う」

「はあ……？」

「たぶん、この壁は私たちの身元を証明したいんだと思うの。だからこっちがちゃんと答えられれば大丈夫」

「……どっからくんだよ……その自信は……ええと、俺らは公立旭台高校三年で……」

『……身元確認完了』

宗志の言葉を遮るように壁が告げた。

意外にもあっさりした反応に肩透かしをくらったような気持ちになる。

「な、なんだよ、まじで……」

「わからない……でもなんなんだろう、これ」

千夜は興味半分に壁に触れてみた。冷たい、無機質の壁だ。こんな

洞穴の中に金属（？）の壁なんて不自然過ぎる。明らかに作為的で、不審だ。しかし人の手にしては地下深くにあるし、今の時代にこんなモノを作る技術などあるだろうか。

不意に彼女は自分が目前の出来事に対して冷静過ぎるように感じた。むしろ、おかしい既視感すら覚える……私は、これを、知っている……？

「千夜？」

宗志はどこか訝しげな表情でこちらを見ていた。

「うっん………なんでもない」

今思ったことを口にしても彼を混乱させるだけだと思い、千夜は首を横に振った。

「そか………この壁、喋れるんだよね？」

「みたいね………AIってやつかな？」

「なら聞けばいいんじゃないのか？これがなにかを」

8・デューク

宗志は恐る恐るといったふうに、口を開いた。

「お前は……なんなんだ？」

彼の問いに壁は一瞬の間を空けて答えた。

『私は自律思考型跳空船、認識コードNR0314。AIのコードサインはデューク……』

「……自律……船……？……デューク……？」

宗志は意味をわかりかねるように壁の言葉を反芻した。

「……あなたはどこからきたの？」

代わりに千夜が問いかける。

『……私は西暦2099年からある目的を果たすために来た。つまり、お前たちのいう未来からだ』

……未来……？……2099年？まるで悪い冗談だった。

「なに言ってるんだよ？！未来から来たやつがどうしてこんな地下に埋まってるんだよ……？」

壁——デュークは沈黙した。

「説明……できるわ……」

答えたのは意外にも千夜だった。宗志の少し後ろに立って、なにやら考えるように顎に手を当てている。

「ずっと、昔からここにあったのよ、私たちが生まれる前から……いえ、この大地ができるときから……」

推測であろうにもかかわらず、彼女の言葉はどこか相手を納得させるような雰囲気を感じていた。

「どうということだよ……？」

「言葉のままよ。この船は実際にこの場で何年も……何百年も過ごして来たってことよ」

まさか……。宗志は発しようとした言葉を発せないまま、ぽかんと口を開けた。

「……つまり、こんなものがずっと前からここに……？」

「そういうことになるわ………正解かしら……？」

千夜はデュークに向き直る。

『おおまかにはその通りだ……』

「な……そんな馬鹿な？！だいたい、千夜もどうしてそんなことが……？」

困惑した様子の宗志に千夜は、

「それは………私がこれを操縦していたから………」

9・千夜

それは……別れの言葉。それまでの日常と……それまでの自分と……彼との……

思っていた通り、彼は信じられない、という顔をした。

「信じられない？」

「当たり前だ……」

彼がそう言うのももつともだ。ついさっきまで、自分ですら忘れていたのだから。そういう風に自分でしたというのに……

「だいたい千夜は俺の幼なじみだろ？昔からよく遊んだじゃんかよ？」

「記憶操作くらいできるの、簡単に……自分のものも、他人のものも。そういう時代から来た」

ただ淡々と告げる。悟られるわけがないが、内心を悟られるのが嫌だった。

「あなたといたのは二ヶ月くらいよ」

「なんだよ……じゃあ、俺や……啓一が知っている千夜は……」

「南澤千夜という人間はこの時代には存在しないわ。私が生まれるのはまだ先よ」

2081年5月6日。それが私の生まれた日だ。記憶にない、しかし、忘れもしない、父親と母親を失った日。

「で、でもお前、この船はずっと前からここにあるって言ったじゃないかよ?!」

「そうよ。確かにデュークは昔からここにある………正確には跳躍先が狂って太古に飛ばされたの。そしてこの場所で直接時間軸の操作をしたわけ」

自分でも迂闊だった。本当ならばこの時代の、この洞穴のある山に到着するはずだった。着地座標が確定した時点で、本部へ座標を転送する。そこまではうまくいったのだが、突然襲ってきた時空震に

座標を狂わされたのだ。

おかげで気を失い、時空外を漂流したあげく到着したのは太古だった……いや、正確には時代すらわからなかった。

しかたなく位置だけを予定に合わせ、その場で再び跳躍。今の時代まで時間を早送りしてみれば、そこは山の中だった。

「…幸いにも戦時中の穴があったからここから出ることはできた。後は記憶操作だけど……こっちも説明いる？」

宗志は首を横に振った。

「もう俺にはいっぱいはいだよ。聞きたいことは一つだ……今まで千夜が説明してくれた通りとして、千夜がこの時代に来た理由はなんだ？」

そう…彼がそれを知りたいのももつともだ。聞かれたら教えないわけにはいかないだろう。

……私は、少し躊躇ってから口を開いた。

10・未来（前書き）

お久しぶりです。身も心も一段落ついたので、連載再開です。これからよろしくお願いします。

10・未来

「私がいた時代は戦争の真つ最中。人類初の、人間対人間ではない戦争」

「人間対人間ではない、戦争…？」

「そう……」

千夜は未来を思い出すように目を閉じた。

2099年。新世紀始めから増加し続けていた人口は近年現象の一端をたどっていた。

原因は戦争のためだ。果てしない、いつまで続くかも定かではない、戦争。

その相手は人間ではなかった。

神威と呼ばれる（人が一方的につけた呼称だが）未知の生命体……いや、正確には生命体であるのかすら確かではないものの戦争。

人類は総人口の半数近くを犠牲としながらも戦い続けていた。

2099年8月15日。

絶望的ともいえる神威との戦い。人類連合政府は一つの計画の実行を決断する。

『オペレーション・イコノクラスト』

それはまさしく人類の未来を決める計画であった。

計画の発端は2099年当時に発見されたタイムマシンの設計図だった。50年近く昔のもので、設計された時代にはただの夢物語に違いなかったろうが、長年の神威との戦争で発展した技術を持つてすれば、不可能ではなかった。

そもそもどうして昔にこのようなものの設計理念が考え出されたのかは謎であったが、その時の人間にそんなことを深く考えている余

裕はなかった。

2099年12月24日。『オペレーション・イコノクラスト』始動。

急ピッチで造られたタイムマシンは開発チームによりデュークと名付けられ、パイロットにはチームの一人であつた千夜が自ら志願した。

同日。23時31分。

人類側の行動を察知したのであるとか、デュークを造っていた地下研究所へ神威の激しい攻撃が開始された。

その中を千夜はデュークを発進させた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9222c/>

カコノミライ

2010年12月5日09時39分発行